

## 仙人通信 172 鐘撞堂山(330m)

鐘撞堂山は、寄居駅の北側に座し、鎌倉時代の武将でこの山の北面に勢力圏を誇った猪俣友綱が、周囲の動向を一早く得る為に、鐘撞堂を山頂に作った事に由来する山である。又3等三角点の山でもある。秩父鉄道の桜沢駅近くの八幡神社・八幡山→鐘撞堂山→羅漢山→五百羅漢→少林寺→寄居駅へと戻るコースを計画した。

国道140号線の横にある八幡様の社殿の裏からのスタートである。樫・青木の混じった桐・檜等の林に囲まれたコースで、ロープが張られた片麻岩質の岩尾根である。近くを走る八高線や秩父鉄道の音が気になるも、鶯や四十雀等の小鳥の歌声に癒されての登りだ。15分程登ると最初のピークで、鐘撞堂山①の標識がある。このピークを境になだらかな尾根コースとなり、咲き始めたばかりのヤマツツジやミツバツツジの先に、霞んではいるも長瀬方面の山が望める。10分程で大正池の分岐を過ぎ、更に5分で②の標識の八幡山の山頂である。展望は利かぬも長閑な山頂だ。ツツジに加えてピンクのウグイスカズラや白いキイチゴの花、そして白い穂を付けたコウヤボウキが芽を膨らませている。⑥の標識を過ぎるとカタクリ保護の標識があり、足元や北側斜面に咲き始めたカタクリの花が散見され、予期せぬ花に心が満たされた。10分程で北面にある谷津池へと下る分岐点を過ぎ、平坦な道から角材を使った急な階段の登りとなる。南側の伐採された山肌には白いコブシやサクラが、又10本近くあるサンシュウも黄色い見事な花を付けている。土手ではアカネスミレや赤いボケも元気だ。登り始めて丁度1時間半で鐘撞堂山の山頂に到着である。四阿屋・展望台・釣鐘がある山頂だ。開けた南面には、桜の花の先に登谷山が、その先には霞んだ堂平・笠山が望めた。説明板によると当時の鐘は、天正18年の小田原城攻めの際に、持ち去られたとある。現在吊るされている釣鐘は、直径40cm程の鐘である。記念にと叩きました……。休憩後、円良田湖に向かう尾根を10分程進むと、1.5m程に簡易舗装された林道となる。瀬音を聞きながら15分程下ると円良田湖の湖尻だ。車道を横切り羅漢山への登りのスタートだ。こちらは丸太状に作られたコンクリートの階段で、ピンクの乙女椿が見事である。15分程で釈迦如来の石仏が立つ山頂である。ここからは、500羅漢のコースと700近い荒神や十一神等の板碑が並ぶ2つのコースで少林寺まで続く。羅漢様の方を進むことにした。九十九折状の山肌側にほぼ1m間隔で並ぶ羅漢様は、多様な顔をなされており、亡き人に会えると、藤村の『桜の実の熟する時』の終章の興津の清見寺の事が書かれていた気がして、30分近く掛けて拝顔しながら少林寺に下山した。少林寺からは、一般道・国道を寄居駅まで歩いた、3時間半(18000歩)の早春の山里の旅となりました。帰りに荒川の対岸にある鉢形城の「三の曲輪」に寄り、辿って来た山脈を確認し楽しみました。(h30.3. 28)

鐘撞堂山全景(鉢形城跡から)

山頂

ヤマツツジ

羅漢様

